

タイトル

あさりのきもち

【人物一覧表】

関内悠真（6） 保育園児

あさり

関内美鳥（38） 悠真の母親

関内康二（40） 悠真の父親

室井京造（52） 近所の怖いおじさん

正田直政（46） 魚屋「魚正」店主

友達

【あらすじ】

関内悠真（6）は妊娠中の母に代わって初めてのおつかいへ行く。買ったのはあさり。あさが生きていることを知った悠真はまるで妹や弟を守るように大切に持ち帰る。

だがその帰り道は困難に満ちていた。自動車に泥水はかけられるし、犬には吠えられる。友達からの誘惑や、さらには怖いおじさん……。しかしあさりと一緒だからこそ乗り越えることが出来たし、いつしか二人（？）の間には絆が芽生えていた。

だが帰宅後あさは沸騰した鍋へ落ちる。ショックを受けた悠真は寝込んでしまう。

夢の中で悠真はあさりと再会する。

「ごめんなさい」と謝る悠真にあさは「自然の摂理だ」と彼を諭す。それでも悠真は命を食べることに強い抵抗を示す。だが、

「生まれてくる赤ちゃんは誰が守るんだ？」あさに尋ねられた悠真はお兄ちゃんになるために命を食べることを受け入れる。

○ 関内家・玄関・中

座り込んで靴を履く関内悠真(6)

悠真の後ろに立つ関内美鳥(38)

美鳥は妊婦。

悠真、立ち上がり振り返って、

悠真「じゃあいつてきます！」

美鳥「(不安げに) … 本当に行くの？」

悠真「行く！」

美鳥「…でも悠真、知らない人と話すの苦手
でしょ？」

悠真「できるよ！お兄ちゃんだもん！」

美鳥「お兄ちゃんスイッチ入っちゃったか…」

悠真「だって赤ちゃんに必要なんでしょ！？」

美鳥「確かに母体には良いって言うけど、す
ぐに必要なわけじゃないし…」

悠真「今日買うの！」

美鳥「…うーん、じゃあもう一回確認して」

悠真、手に持った子供用バケツを美鳥
に向けて、

悠真「『魚正』さんであさりを買う！お金はリ

ユツクの中！小マメなすいぶんほきゅう！」

美鳥「：分かってるじゃない」

悠真「分かってるよ！」

外へ飛び出して行く悠真。

美鳥「あ！ちよっと！」

追いかける美鳥。

○同・外

玄関から出て来て、走り去る悠真。

悠真「行ってきたーす！」

遅れて飛び出して来る美鳥。

美鳥「コーッ！走るなーッ！」

不安げにため息をつく。

盛んに鳴く蝉。

走る悠真の背中と、揺れるリュツク。

T「あさりのきもち」

○魚正・外観

色とりどりの魚介類が並ぶ魚屋。

○同・前

店先に恐る恐る顔を出す悠真。

悠真「……」

不安げに辺りを見回す。

店の奥から出て来る正田直政（46）

正田「おう！ 関内さん所の悠真じゃねえか」

悠真、正田の声に驚いて硬直。

正田「今日はおつかいか？ エラいいじゃねえか！」

悠真「……」

正田「…相変わらず人見知りだな。まあいいや。それで今日は何が欲しいんだ？」

悠真、ぎこちなくバケツを差し出す。

正田「（考えて）…あさりか？」

悠真、小さく頷く。

正田「よし分かった！ オマケしてやる！」

豪快にバケツにあさりを入れる正田。

正田「あさは鉄分豊富だからな。悠真の母ちゃんには一番必要だぞー」

バケツを受け取って中を覗き込む悠真。

水中のあさりからニユルツと水管が伸びてきて、びやつと水を吐く。

悠真、驚いて、

悠真「…コレ生きてるよ！？」

正田「おう！朝取れの元気ビンビンだぜ！」

悠真「げんき、ビンビン…」

正田「…だがなこの日差しはあさりもキツイ。
あつという間に茹だっちまう。おう、お前
が守ってやるんだぞ」

悠真、力強く頷く。

悠真「…守る！」

ニツと笑う正田。

悠真、バケツを抱えて走り出そうとして、
室井京造（５２）にぶつかる。
ビチャツと濡れる室井の足。

室井、ギロツと悠真を見下ろして、

室井「前見て歩け」

悠真「…」

正田「すいません！今タオルを！」

室井「…いやいい。すぐ乾く」

逃げるように走り去る悠真。

正田「あ、お金！　：まあいいか」

悠真、既に遙か彼方を走っている。

○道

閑静な住宅街。

立ち止まって呼吸を整える悠真。

悠真、バケツを覗き込んで、

悠真「：はあはあ。びっくりしたね」

バケツの中、プカッと泡を吐くあさり。

悠真「大丈夫だよ。ぼくが守るから！」

直後、後ろから迫ってくる軽トラ。

悠真の横を通り抜ける瞬間、バシヤッ

と泥水を跳ね上げる。

悠真「：ッ！」

悠真、咄嗟にバケツを守るが、靴は泥

水で汚れる。

悠真「：うつ」

涙が込み上げて今にも泣き出しそう。

あさりの声「ありがとう」

突然聞こえた声に戸惑う悠真。

恐る恐るバケツを覗き込んで、

悠真「…あさり？」

パツと目を輝かせる。

× × ×

歩きながらバケツを覗き込む悠真。

悠真「ぼくはゆうま！6さい！」

うんうんとあさりの声を聞いて、

悠真「そっかーぼくのがお兄ちゃんだね！」

プカッと答えるように泡を吐くあさり。

悠真「あのね、今度あかちゃんが生まれるん

だよ！楽しみだねー」

ぴゅつと、あさりの吐いた水が悠真の

顔を濡らす。

ケタケタ笑う悠真。

悠真「あさりにも見せてあげるね！」

ハツとなにかに気づいて電柱の影に隠

れる悠真。

道の先を室井が歩いている。

悠真、バケツを抱きしめて、

悠真「大丈夫。怖くないよ。ぼくが守るから」

あさり「……」

悠真「ぼくはお兄ちゃんだから」

○民家・前

二階建て一軒家。

庭先で小型犬が眠っている。

門扉の前まで歩いて来る悠真。

悠真「……あ」

犬の近くにはボールが転がっている。

悠真「……あのボールはぼくのなんだ」

あさり「……」

悠真「あかちゃんにあげようと思ってたのに、

アイツが取ったんだ……」

悠真、そっと門扉に手をかける。

悠真「……平気だよ。ぐっすり寝てるから」

抜き足差し足で犬の方へ歩いて行く。

悠真の額を流れる汗。

眠り続ける犬。

ボールまであと少し。手を伸ばせば届

くという所で：犬と目が合う。

悠真「げッ」

尻尾を振りながら近寄ってくる犬。

犬は悠真のバケツに興味津々で中に顔を突っ込もうとする。

悠真「ダメ！食べちゃダメ！」

必死に悠真は抵抗するが、犬は止まらない。

バケツの中に頭を突っ込んだ瞬間…。

ビヤッ！と犬の顔に塩水がかかる。

キャン！と悲鳴を上げる犬。

悠真「…ッ！」

咄嗟にボールを掴む悠真。

急いで門扉の外に飛び出すと、塀にもたれて息を整える。

悠真「…はあはあ。助けて、くれたの？」

あさり「…」

悠真「ありがとう」

プクツと答えるように泡を吐くあさり。

○道

意気揚々と歩く悠真。

足取りは軽く鼻歌を歌っている。

バケツを振り回すせいで、水がこぼれるが悠真は気にしない。

悠真「ラクシヨー、ラクシヨー」

友達の声「おい悠真！」

悠真が振り返ると、公園のジャングルジムの上で、友達数人が手を振っているのが見える。

悠真「あ、みんな何してるの！？」

悠真も手を振り返す。

○児童公園

木陰でバケツを覗き込む悠真。

悠真「ちよつとぐらい大丈夫だよ！」

ビヤツと、まるで抗議するかのうにあ

さは塩水を吐く。

悠真「それはそうだけど…」

友達とあさりを見比べて考える悠真。

しゅんと肩を落としてため息。

悠真「…うん。お母さん待ってるよね」

友達の声「うわ！なにコレ！」

悠真「え！なに！？ぼくにも見せて！」

走って行く悠真。

ベンチの上に残されたあさり。

やがて時間と共に木の影が移動して、

陽の光があさを照らす。

× × ×

友達に手を振り別れる悠真。

悠真「じゃあねー！」

あさりの所へ戻って来る。

悠真、バケツを見下ろして、

悠真「…アレ？」

だらんと元気なく水管を垂らすあさり。

何度つついても反応がない。

○道

バケツを抱えて走る悠真。

悠真「…どうしよう！どうしよう！どうしよ

う！」

バケツの水で服が濡れるが、気にして
いる余裕はない。

悠真「ぼくのせいで：ぼくが：、ごめんなさ
いッ」

直後、もつれる悠真の足。

「あ：」と動く口。

バシヤッ！と、悠真は受け身も取れず
派手に転ぶ。

悠真「あ：あ：」

恐る恐る顔を上げる悠真。

道路には散らばったあさり。

悠真、擦りむいた手であさを拾おう
とするが、ポロポロと指の間からこぼ
れてしまう。

周囲に人影は無く、ひぐらしの声だけ
が響いている。

悠真「：ウウウうわああアアアンッ！」

悠真の泣き声が辺りに響き渡るが、助
けてくれるものはいない。

だがガラッと民家の玄関扉が開く。

出て来たのは室井。

室井「どうした」

恐怖で硬直する悠真。

悠真の前に立ちはだかる室井。逆光で強面で威圧的。

室井「何があったか説明しろ」

悠真、しゃくり上げながら言葉を絞り出す。

悠真「…しん、しん、死んじやった…」

室井「死ぬ？」

悠真「…うう」

室井「泣くな！」

悠真「…ッ」

室井「ゆっくりでいい。どうして欲しいか、

自分の口で言え」

悠真「…あ、あ、あさり、助けて、ください」

地面に散らばったあさりに気づく室井。

室井「…よし」

しゃがみ込んで拾い始める。

悠真、呆然と室井を見つめる。

室井「早くしろ！車が来たらどうするんだ！」

ビツクと驚いてあさを拾い始める悠

真。

○室井家・庭

バケツに入ったあさりを見下ろす室井。

室井の後ろで立ち尽くす悠真。

室井、バシヤバシヤと庭の水道であさを洗いながら、

室井「これで全部だな」

続けて塩を振りかけて混ぜる。

バケツの中で水が渦巻く。

不安げに覗き込む悠真。

悠真「……」

ゆっくりとあさりから水管が伸びてき

て、ぷかっと泡を吐き出す。

悠真「魔法の粉使ったの！？」

室井「ただの塩だよ」

悠真「魔法の、すごいおじさん……」

室井「だから塩だって……」

悠真「良かった……生きてる……。おじさん……ありがとう……」

室井「……」

照れ臭そうに頬をかく室井。

○関内家・前（夕）

落ち着かない様子の美鳥。家の前を行ったり来たり……。

スマホを見下ろすと、画面にはママ友から「ゆうまくん公園で遊んでたよ」とメッセージが届いている。

美鳥「あの子……何時間遊んでるのよ……ッ」
遠くから聞こえてくる救急車の音。

美鳥、ハッとして心臓の辺りを抑える。

美鳥「……ッ！」

たまらず走り出そうとした直後、
悠真「おかあさああああん！」

夕日を背に走って来る悠真。

美鳥「悠真！」

走って来る悠真を抱きしめる美鳥。

悠真、全身泥だらけで傷だらけ。

美鳥「なんでこんなボロボロなの！？何やってきたの！？」

悠真「へへへ転んだ」

美鳥「転んだ！？怪我は大丈夫なの！？」

悠真「大丈夫だよ！絆創膏もらったから」

美鳥「もう絶対おつかいなんか行かせない！」

悠真「えーッ！やだよ！…あそうだ！」

美鳥から離れる悠真。

悠真、あさりに美鳥を見せる。

悠真「これがお母さんだよ！」

美鳥「…？」

悠真「ここにあかちゃんが入ってるんだよ！」

訝しげな美鳥。

笑う悠真。

○同・LDK（夜）

料理をする美鳥の横、今日の出来事を身振り手振りを交えて話す悠真。

美鳥、疲れた様子でため息。

美鳥「そう…大冒険だったのね…」

悠真「うん！」

美鳥「しかもお土産までもらっちゃって…」

ダイニングテーブルの上には悠真のり

ユツクが置いてある。中にはお菓子が

いっぱい。

美鳥「…今度おじさんところに一緒にお礼に

行こうね」

悠真「うん！」

美鳥「でも悠真、お金を払わないのは絶対に

ダメ！警察に逮捕されちゃうんだから！分

かった？」

悠真「もう分かったよ…」

美鳥「はあ、魚正さんにも誤りにいかなきゃ

…」

ステンレスボウルを覗き込む悠真。

中にはあさりが入っている。

悠真「あのね、お母さん。初めてのおつかい

があさりで良かったって思った！」

美鳥「…なんで？」

悠真「なんでも！」

美鳥「…ふーん。でもしばらく買い物はママと一緒にね。本当に生きた心地がしなかったわ」

悠真「（あさりに）あそうだ！ランドセル見せてあげる！」

リビングを飛び出していく悠真。
再び戻ってきた時には背中にランドセルを背負っている。

悠真「ほら！」

ジャツと、鍋の中に落ちるあさり。

呆然と立ち尽くす悠真。

淡々と料理を続ける美鳥。

ふと無言の悠真に気付いて振り返る。

美鳥「…え？」

見開いた悠真の大きな目から、じわつと涙が溢れ出す。

○同・外観（夜）

帰宅する関内康二（40）

康二「ただいまー」

○同・LDK（夜）

ダイニングテーブルで夕食をとる康二。

康二の前で頭を抱える美鳥。

康二の隣にはラップのかかった子供用の食事が置いてある。

康二、あさりの味噌汁を啜って、

康二「そうか。それで悠真はご飯も食べずに寝てるのか……」

美鳥「うん、あさりのこと友達とか兄弟みたいに思ってたんだと思う……。」「守れなかった！」「って泣いてたから……」

康二「……なんか格好いいこと言うな」

美鳥「どうしよう。このままご飯食べられなくなっちゃったら……」

康二「心配ないと思うけど……」

康二、あさりの入ったお椀を見下ろして、

康二「でもちよつと分かる気がするな」

美鳥「分かる？」

康二「うん、あさりってさ他の食材とちよつと違うだろ？調理する直前まで生きてるものを、食べるために殺すんだ」

美鳥「……」

康二「なんかいつも罪悪感あるんだよな……」

美鳥「やめてよ。私も食べづらくなっちゃうじゃない……」

康二「でもその感覚は大切だよ。本当なら全てのものを食べるために殺しているんだから」

じつと黙り込む美鳥と康二。

康二「明日おれからも言ってみるよ」

美鳥「……うん」

康二「でも出来る限り悠真の意見を尊重してあげよう」

不安げに頷く美鳥。

○同・悠真の部屋（夜）

電気の消えた子供部屋。

ベッドで眠る悠真。頬には涙のあと。

○悠真の夢

ハッと目を開ける悠真。

辺りは田んぼや畑や畜舎などの、田園風景が広がっており、畦道の真ん中に

悠真は立っている。

ふと悠真、手にバケツを持っていることに気づく。

中に入っているのはあさり。

悠真「生きてたの!？」

あさり「いや。わたしはもうこの世にはいない。きみのお母さんがお味噌汁にして、お父さんが食べちゃったからね」

悠真の顔から消える笑顔。

悠真「…ごめんなさい」

あさり「気に病むことはない。自然の摂理だ」

悠真「しぜんの、せつり…？」

あさり「命は命を食べて生きている。食べる

ということは食べられる覚悟があるということだ。ただし人間は例外のようだが」

悠真「む、むずかしいよ…」

あさり「悠真も知らず知らずの内に命を食べ
て生きているんだ」

田んぼの稲穂や畑の野菜が揺れて、畜

舎の動物が顔を覗かせる。

全てが「ゆうまくん、ゆうまくん」と

話しかけてくる。

悠真「…ッ！」

声に耐えられなくなつて耳を塞ぐ。

バシヤツとあさが地面に落ちる。

悠真「そんなのぼく食べられないよ…」

あさり「そうか。好きにするがいい。食べる

か食べないか選べるのも人間の特権だ」

悠真「……」

あさり「だが生まれてくる赤ちゃんはどうす
るんだ？」

悠真「……」

あさり「ご飯を食べないで赤ちゃんを守る

のか？」

じつと、悠真はあさりを見下ろす。

○現在・関内家・悠真の部屋（朝）

ベットで体を起こす悠真。

悠真「……」

ぐーと鳴る腹の虫。

○同・LDK（朝）

ダイニングテーブルにつく悠真。

目の前には湯気の立ち上るあさりの味

噌汁。

不安げに悠真を見つめる美鳥と康二。

悠真「……」

お椀を手にも味噌汁を啜る。

悠真「おいしい……」

手を取り合って喜ぶ美鳥と康二。

ジャリッと、悠真の口に砂の嫌な食感が広がる。

了